

口伝鈔

解説 梯實圓和上

このお聖教は、法然聖人から親鸞聖人へ、そして聖人から曾孫の如信上人に伝えられた面授口決の法門をさらに覚如上人がこれを受け、二十一箇条にわたり筆録されたものです。

▼『口伝鈔』の成立と題号の意味

『口伝鈔』は親鸞聖人の曾孫そうそんであり、本願寺の第三代目の宗主であった覚如聖人（三三〇―三五二）のご法語を筆録したものです。

▽聖人のご遺骨を奉安した大谷の御廟を本願寺と名付けて、浄土真宗の根本道場とし、教団の統合を志しておられた覚如上人は、若いころから『報恩講私記』や『親鸞伝絵』などを著して祖徳の顕彰に努めてこられました。○親鸞聖人の法語の中核は、信の一念に往生が定まるという平生業成説にあることを明らかにする『執持鈔』を著されていきました。

▽『口伝鈔』の意味

「口伝」：口授伝持のことで、師から弟子へと口づてで法義を伝えることで、面授口決めんじゅくけつともいいます。師から口づてで明快に真理を伝えることだからです。「鈔」：親鸞聖人から如信上人へ、そして覚如上人へと口授された尊いお言葉をぬきだし集めた書物ということです。

▼『口伝鈔』の組織とその概要

『口伝鈔』には、覚如上人の自筆本（覚如本）と、乗専法師の書写本（乗専本）とがありますが、いずれも三巻・二十一章から成り立っています。

▽『口伝鈔』二十一章を通じて主張されることは、この書にきて初めて明らかにされる黒谷くろたに（法然）・大谷（親鸞）・大網おおあみ（如信）そして覚如と伝えられたという、いわゆる「三代伝持の血脈けつみやく」を顕わすことでした。

①浄土の異流である鎮西派・西山派などに対して、親鸞聖人の法灯が法然上人の正統であることを強調されるわけです。

②聖人の直系の系譜を引く各地の教団に対して、如信・覚如と伝統してきた大谷本願寺が一宗の根本であることを表明することでした。

③浄土真宗の中核は、信心正因・称名報恩であるということを顕わそうとされた

ことです。

浄土真宗聖典〔注釈版本文の意識〕 第一条

口伝鈔

本願寺の開祖である親鸞聖人が、孫の如信上人に向かつて機会あるごとにお話になったいくつかの物語を列挙しました。

一、あるとき親鸞聖人は次のようなことを仰せられました。

黒谷の聖人（法然房源空聖人）が浄土真宗のみ教えを盛んにお勧めになつてい
た頃のことです。

上ご一人（天皇）を初めとして、偏見をもつて浄土の教えを見ていく人びとが国中に満ちていました。そして、法然聖人が阿弥陀仏の第十八願によつて立つ浄土の法門は、自力を宗とする聖道の諸宗とは教えの構造を異にしているから浄土宗（浄土真宗）として独立しなければならぬと言われたのを論破しようとされてきました。

ちょうどその頃、宮中で七日にわたる逆修のご法要が勤められることになつたのを機会に、安居院の聖覚法院を聖道師として招待し、そのお説教の中で、聖道門の外に、別に浄土宗などあるべき道理がないということを主張させて、法然聖人の教えの誤りを指摘するようにという天皇のご要請がありました。（時代は明らかではありませんが、土御門天皇のご在位中（一一九八―一二一〇）のことではないでしょうか。）

聖覚法院は天皇のお招きには応じましたが、しかし恩師法然聖人が生涯を賭けておられる浄土宗独立のご本懐を、前々からよく知っておられましたから、聖人のみ教えを論破されなかつたばかりか、かえつて聖道門のほかに浄土の一宗が興隆すれば、愚かな凡夫が直ちに真実の報土に生まれて生死を越えしめられるという大きな利益がもたらせるに違いないということを、その機会に強く主張されました。

さて、朝廷では聖覚法院を招いて浄土の法義を批判させられるということを法然聖人がお聞きになり、「もしご法要の時に浄土の法義を論破されるようなことが

あれば、おそらく浄土宗は禁制になり、凡夫が直ちに報土に往生せしめられるという浄土の教えの肝要を主張することができなくなるにちがいない」と心配され、使者を安居院に遣わそうとされました。そして誰が使者として適任であろうかと、内々に人選をされました。そのとき法然聖人は、「私は善信の御房（親鸞聖人）が適任であると思う」といわれたところ、門弟たちも、「それがよろしゅうございます」と同意し推挙しました。

そのとき親鸞（善信）聖人は、再三にわたって固く辞退されましたが、師の命令に背き逃れることはできないというので、一門を代表する使者として安居院の房舎へ向かうことになりました。そのおり親鸞聖人は、師の御房に「この役目は極めて重大ですから、是非どなたかを介添え役として付けていただきたい」と申されました。「それはもつともなことである」というので、善綽房西意を介添え役として同行することになりました。

二人が安居院の住房に到着し面会を申し入れますと、法印はちょうど蒸し風呂に入っておられるとのことでした。取り次ぎを受けた法印は、「御使者の方はどなたか」と問われました。「善信の御房が起こしでございます」というと、法印は大変驚かれて、「この方が御使者としてお出になつたとは、まことに珍しいことだ、ただごとではあるまい」といって、急いで湯殿から出てこられご対面になりました。

親鸞聖人は先の法然聖人の仰せを詳しくお伝えになりました。法印が申されるには、「浄土宗の独立ということとは、法然聖人の前々からのご念願であり、聖覚がどうしておろそかに思いましたるか。たとい天皇の命令でありましようとも、仏道の師のみ教えを破るようなことはできません。それゆえ、師の仰せを蒙るより前に、自力聖道門と他力浄土門との水際をはっきりと区別して、両者の立場を混乱しないように判別し、それだけではなく浄土のみ教えの核心である本願のお心を詳しく申し述べてきました。それというのも、世俗の国王の命令よりも、仏法の師匠の恩徳を重んずるからです。どうぞお心安く思し召されるようにとお申し伝えてください」といわれました。この時の一座の詳しい状況をつぶさに述べる暇はありません。

親鸞聖人は、お帰りになると直ちに法然聖人の御前へまいり、聖覚法印が宮中のご法要で唱道師として御説法された内容を重ねて説いてくださったことを、一言も漏らさずはつきりと申し述べられました。それはまるで一座の説法のようにでした。

そのとき法然聖人は介添え役として同行した善綽房西意に向かつて「善信房の報告に間違いはないか」と仰せられたところ、善綽房は、「西意は、先に法印から、今また善信房から、浄土宗の肝要を同じことばで二座にわたってお聞かせいただきました。言葉では表せないほど有り難いことでございます」といわれたということです。

法然聖人門下、三百八十余人のなかの、高弟であり、またその優れた才能ゆえに選ばれ、使節としての役目を果たされたばかりか、また善綽房西意がこのように証言されました。それはちやうど『法華経』の法座において、釈尊の説法が真実であることを多宝仏が証明された故事に匹敵するといえましよう。このことは親鸞聖人が法然聖人のご門弟であった頃の非常な名誉なできごとでした。

親鸞聖人は、説法も巧みで、いにしえの名説法者に劣らないほどでしたが、「私は生涯、聞法者として終始し、師として弟子に法門の伝授を行ったり、人々に戒律を授ける戒師の地位にいたりはいたしません」と法然聖人の前でお誓いになりました。それによって、布施を期待して在家の信者に気に入られようとしたりすることもなく、施主の特別の招待にも応じられなかったということでした。

その頃京都の七条に源三 中務 丞の孫で、のちの親鸞聖人の弟子になった次郎入道浄信が、一棟の寺院を建立するという大がかりな建築工事を完成し、親鸞聖人に「落慶法要を行います、供養のためにご説法においでくださいませ」とご招待申しあげましたが、聖人は固く辞退されて、上に述べたように、「人師、戒師」になることを止められた旨を仰せられました。それは、聖人は、阿弥陀仏の化身としてこの世にお出になられた方でしたが、五濁の世に生きる煩惱具足の凡夫の身になりきって、凡夫が名聞利養のために説法する不浄説法の罪がどのように重いものであるかをお示しになったものであります。

解説

●法然上人のよき理解者であった聖覚法印にまつわる第一条について

【聖覚法印】

親鸞聖人が敬愛してやまなかつた大先輩です。聖人は法然門下の先輩のなかでも

特に聖せい覚かく法ほう印いんと隆りゅう寛かん律りつ師しの二人を法然聖人の真意を伝えた人として尊敬されていた。

聖覚法印は、「法印大和尚位」という最高の僧位を持ち、「権大僧都」という僧官に補されていた天台の高位の僧でした。

法然聖人が聖覚法印を説得する使者として親鸞聖人を選定されたのは、法然門下で法印と親しく、法印と対等に浄土の教学を語り合える人物は、六歳の年少ではあるが親鸞聖人より外にないとみられたからである。

光明・名号の因縁

浄土真宗聖典【注釈版本文の意訳】

光明と名号は、往生の因であり縁であるということについて。

阿弥陀仏の本願力は十方の世界に存在している全てのものを救おうと働いています。しかしその本願を疑いなく受け入れるものと、受け入れないものとがあります。どうしてそのような違いが生じたのかということについて、『大無量寿経』には、過去に宿善の厚いものは、この世でこのみ教えに逢えば疑いなく信じて喜ぶが、宿善のないものはたとえこの教えに逢えたとしても、本願を信じ念仏することが出来ないから、遇わないのと同じであるという意味のことが説かれています。「過去の因を知ろうと思えば、現在の結果を見よ」といい習わしているように、今生で本願を信じられるか信じられないかという有様によつて、宿善があつたか無かつたかが明らかにわかります。宿善に育てられて、法を受け入れることが出来るようになっていく証拠に、善き師に出会って、本願の信ずべきことを知らされたとき、一おもいの疑いも生じません。そのように疑いの心が生じないということは、阿弥陀仏の光明の縁にあつてお育てを受けて来たからです。もし光明の縁の働きがなかったならば、報ほう土どに生なまれるこのとの因であるような徳をもつた名号を得ることは出来ません。

それというのも、阿弥陀仏の智慧の働きである光明は、真実に背き、愛憎

の煩惱に沈んでいる十方の衆生を明るく朗らかに照らしつづけています。そして、まるで太陽の光が厚い氷を溶かすように疑い心を溶かして、本願の名号を受け入れさせ、涅槃の浄土に生まれるまことの因である信心が初めて私の上に開けおこったとき、真実の報土ほうどに生まれることに決定した正定聚の位に就きます。

すなわちこの位のことを、『観経』には、「阿弥陀仏の光明は、あまねく十方の世界を照らして衆生を念仏するものに育て上げ、本願を信じ念仏するようになったものを、その光明の中に摂め取って護りつづけ決して捨てたまうことはない」とお説きになっています。また善導大師の『往生礼讃』には、「阿弥陀仏は光明と名号をもって、十方の一切の衆生を救い取ろうと働きつづけ、一筋に本願を信じて浄土を願うように働きかけられている」といわれています。

こういうわけですから、往生の信心が定まることは、私どもの智慧の力ではありません。阿弥陀仏の光明のお働きを縁として宿善を育てられ、本願の名号を我が往生の因と信知する信心が起り、報土ほうど往生の正因が得られると知るべきであると親鸞しんらん聖人は仰せられました。これを信心も他力より起こるというのです。

解説

◇光明・名号の因縁

「宿善しゆくぜん開発」といえば、私が素直にご法義を受け入れるようになったこと、つまり「聞法の器」にお育てを受けたことを意味する言葉として、とても慶ばしい表現の一つです。このことを親鸞聖人は、「たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」『教行信証』総序）ともいわれます。一般に宿善とは、過去の世でなした善という意味で用いられますが、今回は、浄土真宗では、この宿善をどのように受けとめているのか、光明と名号の関係を通して講じていただきます。

▼光明と名号

光明と名号をもって阿弥陀仏の救済を語るのは、遠くは曇鸞大師の『往生論註』にはじまり、ここにも引用されているように、善導大師の『往生礼讃』矢法然上人

の『三部経大意』等に示されたところです。

○親鸞聖人も、「行文類」に光号因縁の釈を始め、随所に光明と名号をもって救いの直接・間接の因縁が明かされています。

【光明】：「光明は智慧の相なり」といわれるように、光明は阿弥陀仏の知恵の働きを表していました。

☆自己中心的な想念によつて、もののあるがままのありさまを完全に見失っている私どもは、自己の真相も知らず、生と死のまことの意味もわからず、妄念によつて描き出した愛欲と憎悪にまみれた世界が、あたかも実在するかのように思いこんで迷いつづけております。

【虚妄分別】こもろふんべつ：私どもの心は、生と死を正反対の実体として捉え、自己と他者との截然とわけへだてし、自分に役立つものと、邪魔になるものと、どうでもいいものを分け、愛と憎しみと冷淡とに揺れ動いています。

【無分別智】むふんべつち：仏陀とは、虚妄分別を破り、もののあるがままの姿をさとしたかたですが、そのような真実の目覚めの智慧をいいます。

【大悲方便】：仏陀は、そのような言葉を越えたさとの領域を言葉でいい表し、行動で示して、迷える人々を導いていかれます。この教説こそが人々を迷いから呼び覚まし、真実の領域へと導いていくものです。

【光明】：如来の智慧が教えの言葉となつて人々を照らし導き、人々を真実の世界に向かうように育てはぐくむ有様を表現しているのです。☆それゆえ光明をもって、仏陀が未熟なものを育て導いていかれる調育の働きを表現したり、真実の道理を新知させること（破闍はあん）を表現したり、あるいは念仏の衆生を光の内に摂めとり（摂取）護りつづける利益を表した利されま。

【調育】：太陽に光が未熟な果実を熟させるように、仏の光明には、未熟なものを育て導いて、本願のみ教えを疑いなく受け入れることのできるものに育てあげていく働きがあります。

こうした光明の徳を如来のみ名として示されているのが、

帰命盡十方無碍光如来

南無不可思議光如来

◎光明は名号のいわれであり、名号には光明で表される如来の智慧と慈悲の徳が

こもっていました。それゆえ光明と名号は本来不二の関係にあるというので、光明は無声の名号であり、名号は有声の光明であるといわれる方もいます。

▼自力の善を宿善の体とする

【宿善】：宿とは前世ということ、宿善とは「過去の世でなした善」という意味でした。そこで宿福（過去世でなした福德の行為）とも、宿習（過去世でなした善き習慣性）とも、また宿因・宿縁（過去世でなした善き因縁）ともいわれています。

『大経』下の東方偈（往觀偈）に、

もし人、善本なければ、この経を聞くことを得ず。清浄に戒を有するもの、いまし正法を聞くことを獲。むかし世尊を見てたてまつりしものは、すなはちよくこの事を信じ、謙敬にして聞き奉りし、踊躍して大きに歡喜す。驕慢と弊と懈怠とは、もってこの法を信ずること難し。宿世に諸仏を見たてまつりしものは、梁んてかくのごときの経を聴かんといわれています。

すなわち宿世（過去世）において多くの仏陀に逢い、教えにしたがって戒律を保ち、さまざまな善を修行してきたものだけが、この経（『大経』）を聞いてよく本願を信じ、念仏することが出来るといわれていることを宿善というのです。

善導大師は、『觀經疏』「定善義」に「平等覺經」のころによるとして、「浄土の教えを聞いても信ずることのできない人は、三惡道からやつと人間界に出て来たばかりで、まだ罪障が尽きていないからである。それにひきかえ、この法を聞いて、身の毛が逆立ちするほどの感動を覚え、信受し実践する人は過去世においてすでに浄土の教えに逢い、念仏した經驗をもつ人である」といい、

「この人は過去にすでにかつてこの法を修習して、いまかさねて聞くことを得すなわち歡喜を生じ、正念に修行してかならず生ずることを得」といわれています。

○『口伝鈔』では、「欲知過去因」の文の通りであるといわれています。「過去の因を知らんと欲すれば、まさに現在の果を觀るべし。未来の果を知乱と欲すれば、まさに現在の因を觀るべし」

といわれた四句の偈文の初句です。

☆現に浄土の教えに逢い、本願を信ずることが出来るか否かによって、過去に宿善

があつたか無かつたかを知ることが出来るということです。

☆経釈に説かれている宿善とは、過去世における善行が信心を獲得するための善き因縁になることとということであつて、往生の因になるということではなかつたことがわかります。往生に因は本願の名号を信受する信心だからです。

▽親鸞聖人も、

おほよそ過去久遠に三恒河沙の諸仏の世に出てたまひしみにし

て、自力の菩提心をおこしき。恒沙の善根を修せしによりて、い

ま願力にまうあふことを得たり。他力の三信心をえたらんひとは、

ゆめゆめ余の善根をそしり、余に仏聖をいやしうすることなかれとなり

「唯信鈔文意」

といわれています。

☆信心の行者は阿弥陀仏以外の仏・菩薩を軽蔑したり、自力の善を誇ってはならないと戒めるために、『安樂集』に引用された『涅槃経』の意によつて示された教説でした。私どもは、過去世において、ガンジス河の砂の三倍したほどの無数の仏陀たちに逢い、自力の菩提心を発し、無数の善根を 実践してきた経験をもっている。それゆえ、いまこの経に遇い、本願他力の救いをはからいなく受け入れることの出来る身になったのであると説かれている。

だから、念仏者は自分を育ててくれた仏・菩薩や、自力の菩提心をはじめ とする諸行を誇るようなことがあつてはならないといわれているのです。

◎宿世の善とは、聖道門・浄土門に限らず仏教で説かれている、一切の善なる行為を意味していたといえましょう。勿論それは自力の善にちがいありません。要するに、過去世から現世の信心獲得の直前に至るまでになした、信心を得るための善き因縁となる一切の善行を宿善と呼ばれていたと見るべきでありましょう。

▼光明(他力)をもつて宿善の体とする

親鸞聖人は、

ああ、弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真實の淨信、億劫にも獲

がたし、たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ

「教行信証」「総序」

といい、遇いがたくして遇い得たのは、遠く過去世からの如来のお育てのおかげであつたと喜ばれていました。

▽三願転入の述懐をあらわされたところにも、

果遂かすいの誓ちかひ、まことに由ゆえあるかな。ここに久しく願海に入りて、深
く仏恩を知れり 「化身土文類」

自力のとらわれの強い私を、第十九願の自力諸行往生の法門から第二十願の自力念
仏の法門へと引き入れ、最終的に完全に自力を捨てさせて第十八願の他力回向の法
門へと転入させてくださった果遂の誓願（第二十願）の働きを讃仰ちやうぎやうごうされた言葉
です。

親鸞聖人にとって、宿善の本体は、四十八願でいえば、十方の衆生を第十八願の真
実に導こうとして設けられた聖道門も含めた第十九願、第二十願ちやうぎやういんの調機誘引ちやうぎやういんの働き
であり、阿弥陀仏の果徳でいえば、十方の世界を照らして一切の衆生を調育されて
いる遍照の光明の働きであったというべきでありましょう。

【第十九願】…菩提心をおこし戒律を保ち、自利と利他の行を積んで自己の心身を
浄化していく聖道門と同じ厳しい修行です。

【第二十願】…心を阿弥陀仏に集中して絶え間なく称名を続けて功德を積む自力念
仏の道が説かれています。

◎こうした自力の法門を勧められているのは、阿弥陀仏が私どもに、自信の罪業の
深さを思い知らされて、邪見驕慢じゃけんきょうまんの心を砕き、自力を捨てて本願他力をたのませ
るための調育の手段だったのです。

◎自力を捨てさせるためには、自分が自力の修行に耐えられないものであるという
ことを思い知らせなくてはなりません。そのためには、厳しい自力の修行をさせ
てみせることが一番ですから、第十九がんとそれを広げて説かれた『観経』には
さまざまな自力の修行が説かれているのです。

▽宿善の内容

実際の教えの通りに修行を始めみると、煩惱は余りにも強く、修行能力は余り
にも弱すぎて、自分の力無さを思い知らされ、本願他力にまかせる以外救われる
道のない身であったことに気づきます。

▽宿善の当相は自力であるが、その体は他力である

宿善は、行っている当人は自分の力で修行していると思っ
ていますが、まことは阿弥陀如来の大悲智慧の調育の働きが私を育てていたのです。

出世のみもとにありしとき

大菩提心おこせども

自力かなはで流転せり

「正像末和讃」

と全く違った意味で讃詠されています。

ここでは、過去において無数の諸仏にお逢いし、教えにしたがって大菩提心を発して修行をしてきたけれども、自力ではどうしてもさとりを開くことが出来なかった。その証拠に、ただ今もこのとおり煩惱具足の凡夫として流転を繰り返すしかない身であるといわれているのです。

○そこには、宿善によつて自身の罪障を思い知らされ、自力無劫と信知する機の深信じんしんが育てられてきたことが告白されています。

久遠劫くおんこくよりこの世まで

あはれみましますしるしには

仏智不思議につけしめて

善悪・淨穢じょうえもなかりけり

という深い喜びもありました。

☆こうして宿善とは、一方では自力じりきむこうの行によつて自力無劫と信知されると同時に、阿弥陀仏になじませ、善悪・淨穢をへだてずに万人を平等に救いたまう絶大な本願力を信知するように育てていく調育であつたことがわかります。

○機法二種の深信であらわされるような信心を私どもの上に実現してくださいさるのが、宿善のお育てであつたのです。

このような宿善を光明の働きとして示されたのが『口伝鈔』だったので。覚如上人も一往は、宿善を自力の善とみなされていますが、先に述べたように、阿弥陀仏の光明の働きによつて、本願を疑う無明が破られ、浄土に往生する真因である本願の名号を疑いなく信受するようになったといわれていますから、阿弥陀仏の光明のもつ調育の働きが宿善の本体であるとみなされていたといわねばなりません。

蓮如上人仰せられ候ふ。宿善めでたしといふはわろし、御一流に

は、宿善ありがたしと申すがよく候ふよし仰せられ候ふ

「蓮如上人御一代記聞書」

といわれたものは、浄土真宗の宿善の特徴を見事にいい表されています。

「宿善めでたし」…自分が善根を積んだからこそ、こうして法に逢うことが出来た

と、宿善を自分の功績として誇っているから自力の宿善観になります。

「宿善ありがたし」：自力の修行をしたことも含めて、すべては阿弥陀如来のお育てのたまものであったと味わう表現ですから、浄土真宗の宿善観としてふさわしいといわれたものです。

【宿善】：自分がいま思いがけなく尊いみ教えに逢い、救われた慶よろこびと感動を、遠い過去に遡さかのぼって表現している言葉であって、宿善を積み重ねることによって教えに逢おうとするような次元の教説では決してなかったのです。

浄土真宗聖典【注釈版本文の意訳】

阿弥陀仏の無碍光の働きによって、本願を疑う無明の闇がはれるということについて。

本願寺の聖人（親鸞しんらん聖人）はある時門弟に「誰でも知っていることだが、夜が明けて太陽が出るのか、それとも太陽が出たら夜が明けるのか。この二つの見解についてそなた達はどうか」と問いかけられました。そのとき弟子たちは、人々が普通思っているように、「夜が明けて後に太陽が出ます」とお答えになりました。すると聖人は「そうではない」といって、次のように仰せられました。「太陽が出たら夜が明けるのです。というのは、太陽は須弥山の中腹を右回りに回転していますが、東方の世界を照らしていた太陽が、私どもの住む南方の世界に近づくにつれてこの世界が明るくなってくることを太陽が出て夜が明けるといいます。

これはもちろん譬えです。太陽のような阿弥陀仏の無碍の光明に照らされないときは、遠い昔から続いてきた無明の暗闇に夜明けは来ません。ところがいま、宿善のお育てによって、不断光（絶え間なく照らし続ける光明）、難思光（人間の思議を越えた光明）といった徳をもった太陽のような阿弥陀仏が、須弥山しゅみせんのような貪欲（我欲）・瞋恚しんい（怒り）の煩惱の中に近づいてくるとき、本願を疑う心の闇もようやくはれて、信心の智慧が与えられ、本願を明らかに信知するように、炎王光（闇を照らす篝火のような光明）清浄光（貪欲を消滅させる清らかな光明）といった仏の光明を覆い隠しているために、私はまのあたりに拝見することは出来ません。

それを源信僧都は（煩惱に心眼を覆われて摂取の光明を見ることは出来ないけれども）と注釈されたし、私は「正信偈」に（すでによく無明の闇は破られたけれど

も」といつているのです。太陽のような他力のひかりが私に至り届かなければ、自分の力で本願を疑う無明を破るということはあり得ません。無明を破って本願を信ずる心が成就しない限り、生死しやうじの迷界を超え離れる時は来ません。このように本願他力をもって無明（疑心）を破り信心の智慧を開くのですから、へ太陽が出たから夜が明ける」といつたのです。」と仰せられました。

これはさき（第二条）に、光明と名号が因縁となって往生が成就するといわれたことと同じ心を表していますが、とくに無明（疑心）を破るのは自力ではなくて、他力の働きであるという道理（法）を譬えをもって明らかにされたものと、如信によしんしやうにん上人は仰せられました。

解説

◇無明の闇はれる

私たちはさまざまな煩惱を持つ存在です。無明はこれらの煩惱の根元をなすものであるといわれます。阿弥陀仏の光明は、そうした煩惱を持つ私たちの本願を疑う心の闇を破るといって徳をもちています。前条では、阿弥陀仏の光明が、私たちを聞法の器に育てあげるといって調育の徳について語られていましたが、今回は、親鸞聖人が無明という言葉をもとに用いられたかをうかがい、阿弥陀仏の光明が私たちの無明の闇を破るその構造について講じていただきます。

▼光明の三位

「光明」：真如（あるがままの真実）を悟られた如来の智慧と、その智慧が教えの言葉となって迷える人々を導いていく大悲・方便の働きを表しています

○その働きを調育と破闇と摂取という三つに分けて味わうことが出来ます。第三条は、破闇の働きを中心に他力のありさまを表されたものです。

【調育】：如来がさまざまな教えをもって人々を教育し、本願を真実と受け入れることが出来るように機根きこん（理解能力）を調え育てていくことです。

☆光明がものの「いのち」を育て成長させるのになぞらえて調育の光明と呼ぶのであって、育てられる衆生の側からは「宿善」という言葉で表されていました。

【破闇はあん】：本願を疑う心を無明の闇に譬え、如来の光明（智慧）が疑い心を破って

信心を起こさせることをいいます。

☆如来の智慧のもつ無明（無知・疑い）を破る働きを表しています。

【摂取】：本願を信じて念仏するものをその光明の中におさめ取り、護り続けるということです。すなわち信心が起こったときから臨終に至るまで一貫して与えられている利益の根元を表した言葉です。

▽「夜が明けて太陽が出るのか、それとも太陽が出て夜が明けるのか」と問い、それは闇（無明）が去って光り（智慧）が来るのか、光（智慧）が来て闇（無明）が去るのかという問いになおすことが出来ず。

【闇】：光のない、自ら光ることの出来ない状態であります。

【光】：闇を破る 働きのことです

◎闇が去るのは、光が射し込んだからであるといわねばなりません。そこでこの譬えは、疑いの闇（無明）がはれて信心（智慧）を得ることは、如来の光明（智慧）の働きであって、自力で成立することではないという他力の道理を明らかにしようとしているのです。

▼無明といふこと

【無明】：世界はもともと自と他、生と死が一つであるようなあり方をしている、是非、善悪、愛憎といった二元的な対立を離れています。ところが私どもはそのようなまことの世界に気づかず、自己中心的なとらわれによって、自と他、生と死、善と悪、愛と憎しみ、敵と味方というように、すべてを二元的対立的に捉えています。その根元にあるのが、世界のあるがままのすがた（真如・実相）を知らない無知であって、それを無明というのです。

【虚妄分別】：（間違つた認識）真実を知らないから無知とも愚痴ともいいます。

【根本無明】：愛欲や憎悪を生み出し、傲慢や邪見といった煩惱（身心を煩わせ悩ます心の汚れ）を引き起こす迷いの元です。

【無分別智】：無明すなわち虚妄分別を破って、自他のへだてをこえ、生死を一つとさとする智慧の働き

このように智慧の働きが光明であり、尽十方無碍光如来という名号ですから、如来の光明・名号はよく私どもの無明を破り、往生成仏させてくださるといわれるのです。

▼二つの無明

親鸞聖人は、無明という言葉を頻繁ひんぱんに用いられています。その用例を分類しますと、

【痴無明（愚痴を意味する無明）】

① 無明を煩惱と区別して、煩惱もそこから派生してくるような、真如に背く根本無明の意味で用いられる場合

② 「無明煩惱しげくして」といわれているように、無明と煩惱を特に区別せず同義語とされている場合

③ 「無明海」とか「無明大夜」というように、迷いの境界の全体を表される場合

【疑無明】

④ 「正信偈」などに、本願を信ずるとき無明は破れるが、貪欲どんよく・瞋恚しんにの煩惱はありつづけるといわれています。

▽無明が消滅する時について

① 無明煩惱は、凡夫の本性であるから臨終の一念までありつづけ、完全に消滅するのは、浄土に往生したときであるとされる場合

② 信心を得たときに本願力によって無明も煩惱も転ぜられて、成仏すべき身に定まるといわれる場合

▽それらに対して上述のように

③ 信心が起ったときに無明は滅するが、貪欲、瞋恚といった煩惱は臨終までありつづけるといわれる場合

④ 『親鸞聖人御消息』などには、念仏の行者は無明も煩惱も徐々にではあるが薄くなつていくと説かれています。

▼すでに無明の闇を破す

念仏者であってもその現実のありさまは、臨終まで無明煩惱は起り続け、浅ましい生活を送る凡夫としての本性は変わりません。

▽『尊号真像銘文』には聖人自らその文のこころを解釈して、

信心をえたる人せば、無碍光仏の心光つねに照らし護りたまふゆゑ

に、無明の闇はれ、生死のながき夜すでに暁になりぬとしるべしとなり。

(中略) 貪愛とんない・瞋憎しんぞうの雲・霧に信心は覆はるれども、往生にさわしあるべからずとしるべし

といわれています。

愛憎の煩惱を燃やし続ける浅ましい凡夫であっても、老少・善悪の人を選ばず、十方の世界の生きとし生けるすべてのものをわけへだてなく救うと仰せられる十方無碍光如来の仰せを聞き容れるならば、自分の心の善し悪しにとらわれて、本願を疑うような思いはなくなり信心が確立します。

「無明の闇を破す」：不可思議の本願を疑っていた心が無くなったことを意味しています。

○親鸞聖人は、本願を拒絶する疑惑を無明と呼び、本願を受け入れた信心を智慧と見られていたことがわかります。

▼本願疑惑と無明

▽仏教で一般にいわれる疑惑とは、

釈尊が迷いと悟りの因果に真理を説かれた

苦諦（人生は苦であるという真理）

集諦（苦の原因は煩惱であるという真理）

滅諦（煩惱を滅すれば苦は滅するという真理）

道諦（煩惱を無くするには八つの正しい生き方をせよという修行についての真理）という四諦（四つに真理）を聞きながらその真实性を受け入れられず、ためらって決定しない状態が疑なのです。

▽親鸞聖人独特の信疑観、

四諦という自力修行の因果を信じ、善悪業報の因果を疑いなく信じたとしても、それにとらわれて万人を平等に救う願力不思議の法則があることを信受しないかぎりまことの信心ではない、自力の信心は「罪福を信ずる心」であって、むしろ無碍の仏智に背く疑惑であるとみなされていた。

「罪福を信ずる」：「罪悪を犯せば救われず、福行（善行）をなせば救われると信じる」自力の信心を意味していたのです。

仏教でいわれている信心を疑いとし、善悪平等の救いを誓われた不可思議の仏智の表現であるような本願を信じることだけがまことの信心と見られていたのです。

▽自力の疑心を戒めて、

如来の誓願は不思議にましますゆゑに仏と仏との御はからひなり、
凡夫のはからひにあらず 「親鸞聖人御消息」

自と他、生と死、善と悪の隔てをこえた平等の真如をさとられた仏の智慧が、一切の衆生を善悪・賢愚の隔てなく救う大悲の本願となつて顕現しているのですから、本願の領域は、ただ仏と仏とのみがしろしめる不可思議の仏智の世界でした。○凡夫はもちろんだとえ弥勒菩薩のような最高位の菩薩であつても、一分でも虚妄分別のあるかぎり、本願の世界をおもいはかることは出来ません。

善悪二業について

浄土真宗聖典【注釈版本文の意訳】

一、善と悪の二業の行ふことごとく。

親鸞聖人はこのように仰せられました。

「私は往生のために、善を欲しいとも、また悪を恐ろしいとも全く思わない。善を欲しいと思わないのは、阿弥陀仏の本願を疑いなく受け容れる信心にまさる善はないからである。悪を恐れないのは、阿弥陀仏の本願の救いを妨げるような悪は存在しないからである。」

ところが世間の人はみな、全徳をそなえなければ、たとえ念仏をしても往生はできないとか、また、たとえ念仏しても、悪行が深く重ければ往生はできないと思つている。しかしこのような考えは、どちらも大きな間違いである。

もし思いのままに悪行をとどめ、思いのままに善徳を具えて生死の迷いを離れ、除土に往生することができれば、あえて阿弥陀仏の本願を信じなくても何の不足もないはずである。しかし思いのままに悪をとどめ、善を行することができないから、悪行を恐れながらも悪をなし、善徳はあつて欲しいと期待しながらも、得ることができないのが愚かな凡夫なのである。このようなあさましい貧欲、瞋恚、愚痴の三毒煩惱を具えている悪人で、自分の力で生死の迷いを越え離れる道の断えているのを救い取るために、五劫ものあいだ思惟を重ねて建てられた本願であるから、必ずお救いいただけると思ひをまじえずに仏智のおんはからいを受け容れるに越したことはない。ところが善人が念仏していると、必ず往生するであろうと思ひ、悪人が念仏していると、往生できるかどうか疑わしいと思う。そのために凡夫救済の本願の面目を見失ひ、自分が悟

の手がかりさえもない悪人であることを知らないで終わってしまう。

そもそも凡夫ほんぶをわけへだてなく救おうと思し召す平等の大慈悲に促されて建てられた特別の本願を因として、それに報いて完成された果徳としての阿弥陀仏は、本願の通りに一切の衆生しゆじようをわけへだてなく救いたまう報身ほうじん仏であり、浄土は本願を信ずるものを迎へ取る本願成就の報土ほうどである。それゆえ自力を捨てて本願力に身をゆだねるものは、人間や、天人(神々)などの凡夫ほんぶであれ、声聞しょうもんや縁覚えんかくといわれる小乗の聖者や、大乘の聖者である菩薩であれ、善悪・賢愚のへだてなく平等にさどりの領域である報土ほうどに往生せしめられる。このように五乗(人・天・声聞・縁覚・菩薩)を平等に最高のさどりの領域に生まれさせるような本願は、あらゆる仏陀たちが末だかつて発はつこされたことのない超え勝れた不可思議の誓願である。その本願によつて成就された報土ほうどへは、大乘經典を読み、「一切は空くうである」という真理を理解できるような賢善な人であつたとしても、生まれつきの能力によつて獲得した善のちからだけで生まれることは決してできないのである。また悪行は、もともとすべての仏陀が嫌い捨てられるのもであるから、悪を重ねたことを因として浄土を望むことは勿論ありえない。

それゆえに生まれつきの能力でなした善も悪も、報土ほうどに往生するために役にも立たず、邪魔にもならないことはいうまでもない。だからこの善人・悪人の上に与えられている阿弥陀仏の智慧の現れである本願の名号をたよりとしなかつたならば、どうして凡夫ほんぶに浄土に生まれるに足りる徳があるうか。だからこそ「善も欲しくない」悪も恐ろしくないといったのである」と仰せられました。

こういうわけですから光明寺の善導ぜんどう大師は、「弘願ぐがんというは、『大経』の説のごとし。一切の善悪の凡夫ほんぶ、生ずることを得るは、みな阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁ぞうじようえんとせざるはなし」といわれました。この文章の意味は、「弘願ぐがん(一切の衆生しゆじようを包む広大な本願)というのは、『大無量寿経』に説かれているとおりでである。善人であれ、悪人であれ、一切の凡夫ほんぶが浄土に生まれることができるのは、みな阿弥陀仏の大願業力(広大な本願の救済力)に身をまかせて、それを勝れた因縁ぞうじようえん(増上縁)としてたのみにしないものはない」というのです。

したがって、過去世において善を積み重ねたものは、この世においても善を好み悪を恐れるが、過去世で重い悪を造ってきたものは、この世でも悪を造ることを好み、善とは縁遠い生き方をするものです。ただ私どもは、この世で行う善悪の二つは、過去世で行った善悪の因の催すままにまかせてあげつらわず、往生という偉大

な利益を得るのは、ひとえに本願他力によると如来にまかすべきです。決して自分の心の善し悪しにとらわれて往生ができるかできないかの判断をしてはならない、というのです。

こういうことから、あるとき聖人が、「そなたたち、念仏するよりもっとたやすく往生のできる道がある。それを伝授してあげよう」といい、「人を千人殺したならばわけなく往生できる。みなこの教えに従ったらどうだ」と仰せられました。そのときある一人の弟子がいうには、「私の場合は、千人などおもしろいもありません。一人たりとも殺害できるような心地は致しません」と申しました。

聖人は重ねて仰せられました。「そなたは日頃から私の教えに背いたことがないから、いま私が教えたことについてもきつと疑いをさしはさんではないだろうと思う。ところが、一人も殺害できるような心地がしないというのは、この世で人を殺すような種（因）を過去世で造っていなかったからである。もし過去世において人を殺すような種を蒔いていたならば、たとえ殺生の罪を犯してはならない、もし犯せば往生を遂げることができないぞと誡めたとしても、過去の種（因）にもよおされて必ず殺人の罪を作るであろう。この世で行う善行も悪行も二つとも、宿（しゆくゐん）因（過去世の因種）のうながしによる結果として現れたものである。こういうわけであるから、浄土に往生するということに関しては、本願力のはたらきだけによることであって、自分の造った善も悪も助けにはならないし、悪も障りにはならないということ、これになぞらえて知ることができよう」と。

解説

◇善悪二業について

『口伝鈔』は、内容的に『歎異抄』と類似する法語が多いことで知られています。この第四章には、「さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし」という言葉で有名な『歎異抄』第十三条に出る親鸞聖人と唯円房との同種の対話が示されています。今回は、善と悪の二つの行為が浄土往生にどのように関わるのかということ、そしてまた『歎異抄』の「業縁」や「宿業」、「宿因」といった言葉の示す意味について、併せて講じていただきます。

▼『口伝鈔』と『歎異抄』

覚如上人十九歳のとき、常陸の国から上洛してきた河和田の唯円房に会い、真宗の教義、特に善悪二業についての親鸞聖人の考え方を聞きただし、味わいを深めたといわれています。

○人生は思いがけないことの連続であつて、まるで濁流に押し流されるように生きています。何が出てくるか知れないし、また何が出てきても不思議ではないといわざるをえない、不思議な深淵を自分の奥に抱えています。

▽それを『歎異抄』では、「業縁」とか「宿業」と呼び、『口伝鈔』では「宿因」といわれています。

▼宿業問答について

『歎異抄』でいわれた「業縁」という言葉は、人間の意識もとどかず、知性も意志も努力も及ばない、自己自身の存在の深層領域を表現されたものです。

▽それをまた、「さるべき業縁」とも「宿業」ともいわれています。

○「さるべき業縁」とは、自分をそのような状態にあらしめている知られざる因縁ということであり、「宿業」とは、いまの自分には知りようもない不気味な力の促しに自分が押し流されていることの辛さと、しかもそれを我が事として引き受けなければならぬことの不条理をいい表した言葉でした。

▽親鸞聖人はそのことを『歎異抄』では、

弥蛇しごの五劫ごこう思惟しゆいの願ねがひをよくよく案あはずれば、ひとえに親鸞一人がため

なりけり。されば、それほどの業ごうをもらける身にてありけるをたすけんと

おぼしめしたらける本願ほんがんのかたじけなさよ

ともいわれています。阿弥陀仏（法蔵菩薩）が、五劫ごこうもの間思惟しゆいを重ねなければ救いの道を見いだすことができなかったほど、「それほどの業」をもっている身であることを「宿業」といい、「さるべき業縁」といわれたのです。

▽善導ぜんどう大師が機の深信の内容として表現された、自身の内には成仏の手がかりさえないという状況を表す言葉だったのです。

それゆえ『歎異抄』は続いて

「善導の、へ自身はこれ現に罪惡生死ぼんがの凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしづみつねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」という金言に、すこしもたがわせおはしませず」

といい、機の深信に合わされていたのです。

▼『口伝鈔』の宿因について

『口伝鈔』には、

されば宿善あつきひとは、今生に善をこのみ悪をおそる。宿悪あ
もきものは、今生に悪をおこのみ善にうとし。(中略) 善悪のふたつ、
宿因のはからひとして、現果を感ずることなり

といわれていますが、

〈第二章に述べられた宿善〉

信心を得る善き因縁としての宿善で、その本体は阿弥陀仏の光明のもつ調育の働きでした。

〈第四章でいわれる宿善〉

宿善に対する言葉で、今生で善をなし得る素質に生まれるか悪をなすような素質をもつて生まれるかの違いを、前世の善悪業によって説明しようとしたものです。

☆前者は信心獲得の機に育て上げる如来の働きを表そうとする宿善であり、後者は凡夫ほんぶが行う善悪の行為についての説明ですから、両者は別物といわねばなりません。
▽「善悪のふたつ、宿因のはからひとして現果を感ずるところなり」

といわれていることが問題です。

□今生において行う善悪の行為（業）が、すべて過去世の善悪の行為の結果として必然的に現れてきたものならば、過去世の善悪の行為もまたその前世の行為の結果となり、どこまで遡さかのぼっても、行為の主体を捉えることができなくなります。

【行為】：自らの自由な意志によって決断して為す行いのことであって、それゆえにその行為の責任は行為者をもつこととなります。

私が行う善行も悪行も、自分の自由な意志によって決断したことではなくて、過去世に行った善・悪の行為の結果であるとすれば、その行為のまことの主体は現在の私ではなくなり、私は私の行為に対して全く責任を負う必要がなくなります。

☆また悪を行うものは限りなく悪を行いつづけ、善を行うものは限りなく善を行いつづけることになり、悪を転換して善を為すということがなくなり、世俗の論理も仏道修行も成立しなくなってしまう。

◎この論理は仏教がもつとも嫌う決定論・運命論に陥おちつてしまいます。

◎仏教ではそのような過ちを犯さないために、善もしくは悪の行為は因であつて決して果ではなく、それに報いて成立する果は、苦もしくは楽であつて善でも悪でもない「無記」であるといっています。

☆果報は必ず苦・楽という無記の性質を持っていますから、苦なる状況の中でも、善を行うことができるし、楽の中で悪を行うこともできるわけです。こうして苦の現状を転じて楽の果報を招来するためには善を行えという教えが成立しうるのです。